

## 紹介

### ●松菊木戸公傳

#### 木戸公傳記編纂所著

木戸孝允は世に維新三傑の一人と傳稱せらるゝ程の偉大なる政治家であるが未だ詳細なる傳記の世に出でなかつたのを遺憾とし故桂太郎氏等が大正元年編纂に着手し妻木忠太氏編纂主任となり、爾來各地に於ける、資料の蒐集に努め、夫れ等資料の中、主として自叙日記並に往復尺牘を根軸として研鑽し、傍ら先輩の談話をも參考して凡そ十年にして稿を終へ茲に本書を刊行するに至つたのである。全編を上下二冊とし、合せて二千一百餘頁の大部なもので、其の項目を家系と修養時代、勤王時代、維新時代、内政整理時代及び逸事附松子夫の五に分ちて詳細に其の生涯の事蹟を叙述してゐる。彼が長藩を背景として縦横に活躍した人であつただけ其の記事は多岐に

して殆んど維新の全局面に亘つてゐるが、よく其間の史實を詳叙して而も冗漫に流れず、行文亦暢達である。本書は彼を通じて維新史の一面を闡明するに共に當時の局面に當つた大立物たる長藩の動靜去就をも明かにすることが出来て宛然一の幕末維新史とも云ひ得るものである（菊版二二三頁、東京明治書院發行、價二〇・〇〇）〔松野〕

### ●幕末史概説

#### 井野邊茂雄著

プラトンも教ふる如く顧ることは進むことである。今日多數の人々が幕末維新の推移に多大の關心をつなぐ所以は畢竟現代日本の進路を其中に發見せんことをものに外ならぬ。然るにそれらの人々が稱して幕末維新の真相なりとするものは往々にして假想せられたるそれに過ぎざる事を發見するのは歴史家の最遺憾とすべき處であらう。この時に當つて多年この時代の研究に従事せる著者がさきには「幕末史の研究」に於て特殊問題の鮮かな解剖を試み、今またこの新著によつてその一般推移を明か

にしたのは誠にこの缺陷を補ふものにして世に推奨するに憚らぬものである。而して本書に於ける著者の志も一面はそこにあつたに信ぜられる。何となれば近時多くの論者が維新の第一原因として擧ぐる經濟的社會的理由は著者が以て第二に置かんとする所である。著者に従へばそれらの理由は勿論閑却すべからずとするも主因としては寧ろ外國勢力の刺戟を擧げねばならぬ。この主因をめぐつて江戸時代そのもの、含む矛盾社會上に於ける朝廷と幕府思想上に於ける尊王攘夷と佐幕開港政治上に於ける鎖國政策と非戰政策等到底融和し得ざるもの、衝突を見その解決として要求せられ又實現せられたものこそ維新に外ならぬとするものである。かくの如き見解が果して彼の社會的經濟的見解と兩立し得ざるものなりや否やはなほ考究の餘地ありとするも、近時國史に對する唯物史觀の適用が聊か其度を過ぐるの感あるに當つて本書の世に出でたのはそれらの學徒にまつても有力なる他山の石として傾聽すべき價値は充分にあると思ふ。一般歴史愛好者にまつても幕末史を鳥瞰し得べき近來の好著た

るこゝ勿論である。著者はなほみづから維新全史の完成を期して居るに云ふが、切にその實現を祈る次第である。(菊版六九二頁、價五・八〇、東京紀元社發行)(肥後)

● 法制上より觀たる日本農民の生活(律令時代)下

法學士 瀧川政次郎著

律令時代に於ける農民の生活を主として法制上より觀察して、上卷には其收入の方面を詳述したのであるが、本卷に之に對して支出の方面を觀察し、結論を下したものである。

第一章「租稅制度並ひに兵役の制度より觀たる農民の生活」に於ては、田租・徭役・調庸・雜稅を檢討し、標準房戶の租稅負擔による支出を概括し、田租は輕かつたが、調庸は比較にならない程の過重であつた上に、頗る重い雜籬や雜稅が課せられ、その總和は口分田として受ける田地の總收入の大半に達したらしいが、その口分田の收入も彼等の生活を支ふるに足らなかつたから、彼等は各種の手段を講じて脱稅を計つたのであると斷じ、脱稅行